

## 著者コメント——中山善樹

「靈魂のうちにおける神の誕生」がエックハルトの著作を貫く主題であることは疑うことができない。そして私見によれば、これは、エックハルトの秘蹟、特に聖体の秘蹟の把握と密接に関連している。エックハルト研究者として著名なハインリッヒ・エーベリンクはエックハルトは秘蹟を重要視しないと言っているが、これは誤解だと思われる。むしろ私には前述の主題は聖体の秘蹟の重要な思想的解釈だと思われるのである。キリストの受肉の出来事は単なる 2000 年前の事実であるのみではなく、不断に現在も生起しているものであり、それはエックハルトによれば、靈魂のうちで生起しているのである。そしてこれが、本来の歴史性ということであり、事実を認知することに留まるのではなく、それを内的経験として現在化することが重要なのである。したがって、エックハルトの秘蹟論は今まで、研究史において看過されてきたが、今一度再検討されるべきであるというのが私見である。このことを時間論の領域で言えば、エックハルトは根源的時間をクロノスではなく、カイロスとして捉えていることがわかる。カイロスとは、「時が満ちて、神は御子をお遣わしになった」と言われている場合の「時」である。エックハルトにおいては、十字架の「今」と蘇りの「今」は、秘蹟の現在における救済の「今」である。その意味では、エックハルトは現在、この場において、私との関わりにおいて聖書を解釈していると言えよう。それがエックハルトにとっては、聖書の靈的解釈であり、この靈的解釈のうちのみ、エックハルトは聖書の本来的解釈を認めていたのである。